

千葉県下における縄文時代前期後半期の諸問題 (1)

寺 門 義 範[※]

I はじめに

縄文時代前期後半期 — 土器型式の上からは所謂諸磯a・b・c式、十三菩提式、浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式、興津式の時期に該当するものであるが、この時期に関する資料は、千葉県下においても最近の開発造成による緊急発掘調査に伴い、爆発的な量の累積が行われてきている。

しかし、それらの資料を一瞥する時、そのほとんどは一つ一つの遺跡での調査成果としての域を出るものとはならず、あまりにも断片的、かつ散逸的な資料理解に終始している事実に突きあたざるを得ない。この現状は、昨今他地域での該時期文化の総合的な見地に立った解明が、ある程度推し進められつつある中であって、大きな立ち遅れをみせているといえるようである。つまり、千葉県という地域における該時期文化が、中部山岳地帯から関東南西地域にかけて広大な拡がりをもつ諸磯系文化と利根川以北の関東東北地域に中心をもつ浮島系文化との狭間にあって、どのように融合し、かつ、生成・展開していったのか（他地域との関わり合いの上での地域的な理解）とか、千葉県全域に緻密な拡がりをもたせ、特に中期・後期の大規模貝塚の形成で代表される本地域の縄文時代文化の推移を通じての位置づけ（時間的推移の中での理解）とか、あるいはまた、そこに培われてきた人々の生活が、集落構造などの諸要因を含めてどのようなものであったのか等々、未だ解明できない問題を数多く抱えているのである。

そこで本稿では、未だ資料的に偏在的傾向があるのは否めないが、随時資料の追加を図りながら、現在までに知りえた人々の生活地点としての遺跡と生活具としての遺物の上から、千葉県という地域相にみあった該時期文化を吟味検討し、整理理解していきたいと考えている。

II 調査・研究の推移

千葉県における該時期文化に関しての調査・研究は、比較的その歴史も古く、すでに最初の足跡が記されてから約半世紀余りを経過している。すなわち、大正13年、当時土器の編年研究に取り組みつつあった山内清男氏による「下総上本郷貝塚」（人類学雑誌43巻10号）の調査がそれであり、昭和3年に発表された報文に『（一）繊維を含む土器型式、（二）繊維を含まない諸磯式、（三）「勝坂」又は「阿玉台」、（四）加曽利E、（五）堀の内、（六）加

※千葉市教育委員会文化課

曾利 B、(七)「安行」の年代的序列が認められた。(中略)大体に於て関東に於ける土器型式の全般を網羅して居る』として、初めて県内遺跡の出土遺物中に諸磯式土器が存在することを明示したのである。しかしこの段階では、未だ諸磯式土器に対する正確な編年づけをするまでにはいたらず、諸磯式土器の一部に繊維を混入するものがみられるなどの事由から(一)と(三)との間に位置づけるに止まっていた。その後、この編年的位置づけに関する問題は、同氏の真摯な努力の積み重ねに負うところが大きく、東北地方の土器の型式編年と対比しながらその並行関係をとらえ、関東地方の遺跡における土器の層序的な観察を基礎として、昭和5年、土器型式による編年表を提出し、諸磯式土器の編年位置を明らかにするとともに、同12年には諸磯式土器の三型式細分を発表するにいたった。しかも、この山内清男氏による成果は、時を前後して行われた甲野 勇氏の神奈川県十三菩堤遺跡の調査結果とも相俟つことになり、ここに南関東を中心とする縄文時代前期後半に位置づけられる所謂諸磯式土器群の大略が、ほぼ明らかにされることになったのである。

このような中であって、県内では昭和10年、宮崎 紘・稻生典太郎両氏による市川市所在の北台貝塚(旧東練兵場貝塚)の紹介(「下總國堀之内貝塚對岸に於ける古式縄文式土器出土の一小貝塚」史前学雑誌7巻4号)、さらに同12年の杉原莊介氏による久保上・根郷留見両貝塚の調査(「須和田遺跡に於ける二縄文貝塚」考古学9巻5号)が行われたのであるが、これらの調査では、いずれもただ単なる出土遺跡の在り方や、土器出土に対する新知見の加味という段階に止まるものであり、先に述べた南関東地方でのそれには遠く及ぶべきものではなかった。

このように戦前の本県における該時期文化の調査・研究は、前期後半の遺跡発見時代ともいうべき様相に終始するもので、学問的に大きな進展をみせることもなく、昭和20年以降へと引き継がれていくことになるのである。

大戦後まもなく、本県の該時期文化研究の先鞭をつけたのは、藤田亮策氏と大場磐雄氏とであった。まず藤田亮策氏は、松本信廣教授の「古代丸木舟の研究」を援けるため、丸木舟発見地の考古学的調査を担当し、昭和23年、たまたまその所在が知られた安房郡丸山町の加茂遺跡の調査(「加茂遺跡」考古学・民族学叢刊第一冊)を手掛けたのであった。その結果、泥炭地という特殊さをもつ遺跡から、前期後半諸磯式期に位置づけられる土器・石器を、丸木舟・櫓など木製遺物と多くの動植物遺存体等とともに検出し、該時期における加茂遺跡の集落環境や生活の復原にまで論及を派したのである。一方、大場磐雄氏はこのような藤田亮策氏らの調査に対し、翌昭和24年、銚子市粟島台遺跡の調査(「千葉県銚子市粟島台石器時代遺跡調査報告」上代文化22輯)を行い、遺跡の包含層中、その下層から諸磯式及び黒浜式などの前期縄文式土器が出土することを明らかにしている。しかも同氏は、昭和27年に刊行した報告中、『前期の後代に編年される所謂諸磯式型の一異式とも認められる浮島式(仮称)を多量に

存すること（中略）はこの地方における一つの地方相とみるべきであろうが、注意すべき現象としなければなるまい』として、現在、千葉・茨城両県を含んだ関東東北部にその展開が知られている浮島式土器群の存在を予知したのである。しかしこの「浮島式」土器の存在及び名称については、大場氏が最初に注目されたものではなく、すでに昭和26年に出版された「歴史評論」の講座誌上において、江坂輝弥氏が矢上式（諸磯a式の新しい部分と諸磯b式の古い部分に該当）と四枚畑式（略諸磯b式に該当）とに並行する型式として紹介しており、そこではその分布と細分の可能性を示唆するとともに、この種土器にみられる器形・文様上の特徴を解説しているのである。なお江坂氏は藤田亮策氏の調査になる「加茂遺跡」の報告中、土器の項を担当しているが、そこでは出土土器の中にこの種の土器が在るにもかかわらず、「浮島式」なる名称には触れず、霞ヶ浦沿岸より水戸方面にかけて多く発見される土器群として、その文様のな特徴を述べるに止まっている。

この20年代における調査・研究を総じてみると、すでに南関東地方で明らかにされていた諸磯式土器群に対して、それと並行するような形で、関東東北部地域に、独自の型式上での土器様相が新たに提出された時期にあたり、その存在に着目した大場・江坂両氏の業績は評価に値するものである。しかし、いわゆる浮島式土器とされる一群の土器の詳細説明については、さらに少しの時間を費やすことになる。

すなわち、30～40年代にかけて、本県の北境を限る利根川中下流域において、一連の系統的な調査・研究を行ってきた西村正衛氏の業績を忘れてはならないのである。氏は、昭和30年に調査した香取郡神崎町植房貝塚の成果を下に、同貝塚出土の土器編年を目指して、奇しくも、後の浮島式土器の標式遺跡となる茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚の調査（昭和31年調査）を皮切りに、同32年、市川市旧東練兵場貝塚（本稿では北台貝塚）、茨城県稲敷郡興津貝塚第一次調査、同33年、茨城県取手市向山貝塚第一次調査、さらに同42年、向山貝塚第二次調査、興津貝塚第二次調査と相次いで精力的に調査活動を続け、それによって先の大場・江坂両氏らが注目した、所謂「浮島式」と呼称される一連の土器群の在り方を解明するにいたったのである。

この成果は、要約すると、従来霞ヶ浦地方を中心に分布するとされていた「浮島式」とよばれていた一連の土器群が、浮島Ⅰ式、浮島Ⅱ式、浮島Ⅲ式、それと興津式に細分されるもので、その特色ある文様の組成や単純な器形などから、関東西南地域に中心的な分布をみせる所謂諸磯式の土器とは、明らかに異った系統をもつ土器群であることを証するとともに、これら4型式の諸磯式との関係について、浮島Ⅰ式が諸磯b式の古い部分に、浮島Ⅱ式がほぼ諸磯b式に浮島Ⅲ式が諸磯b式の新しい部分に、さらに興津式が諸磯c式にそれぞれ層序的に伴出する事実から、これらの土器群をもって関東東北部地域の縄文時代前期後半の土器群としての編年づけを行ったものといえる。しかも、同氏は、土器編年に止まることなく、前期後半の文化理解

のために、これらの土器と土器以外の遺物との構成、その遺跡の構造等にまで視野を拡げ、その見解は、現在、多くの研究者たちによって「浮島系土器文化」研究の礎として、支持を得るものとなっているのである。

斯様に、本県の該時期文化にも深い関わりをもつ「浮島式土器群」ならびに「浮島系文化」に関する研究は、西村正衛氏の一連の調査・研究を通じてその全容が明らかにされてきたのである。

ここで、昭和30～40年代の県内における、前期後半期に属する遺跡の主な調査を列記してみると、鎌ヶ谷市佐津間山王台遺跡（鎌ヶ谷町史編纂委員会 1967）、成田市三里塚遺跡群（西野 元、他 1971）、野田市北前貝塚（下津谷達男、他 1979）、千葉市宝導寺台貝塚（庄司克 1970）、同高品第2遺跡（キツ長遺跡）・車坂遺跡・星久喜遺跡（中村恵次 他 1973）、船橋市古和田台遺跡（金子浩昌 他 1973）、同飯山満東遺跡（中村恵次 他 1975）それに流山市中野久木遺跡（古宮隆信 他 1974）などの調査をあげることができるが、これら急増した調査では高度経済成長に伴う開発造成の増加ということもあって、県内各地で膨大な量の資料が蓄積されたのである。その結果、浮島式・諸磯式土器を出土する遺跡が増えたことは当然のことながら、その共存割合の多少さについても、数多の研究者によって注目されることとなるとともに、関東東北部地域に中心をもつ浮島式土器と、関東西南地域の諸磯式土器との本県内での地域的な融合関係に一つの問題を提起することになった。

さらにまた、該時期の住居址・土壙等、遺構が数ヶ所の遺跡で発見されたことにより、本県における前期後半の集落研究に対する視野も開かれ、特に船橋市古和田台遺跡における住居址群や、同飯山満東遺跡で住居址とともに検出された200ヶ所余りのピット群などの在り方は、該時期集落を理解する上に一大指針を与え、今後に大きな課題を投げかけたものであった。

その後、50年代の本県での該時期文化の調査・研究は、開発造成がより大量、且つ大型化していくあおりを受け、前時期にも増して数多くの遺跡が各地で調査をされてきているのが現状であり、そこには、真摯な研究を積み重ねていく時間的なゆとりが無くなっていることが痛感されるところである。

以上、該時期文化の研究の足跡を大把みに通観してきたが、山内清男氏による松戸市上本郷貝塚の調査以来、諸磯式とされた関東西南地域に中心的な拡がりをもつ土器群に対して、昭和30年代の西村正衛氏の業績にみられる関東東北部地域に中心をもつ浮島式土器群の存在が提出され、ここに双方の土器群の共存という形をもって、本県の縄文時代前期後半期の文化が成立していることが明らかにされてきたのである。しかも、その土器文化が人間生活を基盤として成り立っていることから、その生活地点としての集落とそれを包括している遺跡に対する研究も徐々にではあるが進められてきたのであり、さらに今後に期するところが大きいようである。

Ⅲ 遺跡の分布と立地傾向

千葉県下における前期後半に位置づけられる遺跡は、地域的に集散はあるものの、現在、他の時期の遺跡と同様、ほぼ全県的にその拡がりをもって分布していることが知られている。

すなわち、『地に即して存在する、人々の生活行動のあと』とされる遺跡は、かりに、地形上の特徴から大別すると、沖積低地・自然堤防・砂丘・河岸段丘などのいわゆる「低地地域」と、海岸及び内陸部にひろがりをもつ一般の洪積台地である「台地地域」、それに尾根・丘陵などのほか盆地・山麓・山裾などを包括した「山岳地域」との3種に分けてみることができるが、これらいずれの地域における遺跡であっても、その「あと」をのこしたのは人間であり、ほかのいかなる生き物でもないのである。由って、その主観者である人間の生活行動の地理的・自然環境的・人文的な諸要因（条件）さえみだし得る場所（生活地点）でありさえすれば、たとえそれが山岳地域の尾根上鞍部であっても、低地地域の微高地上であってもよいのである。換言するならば、遺跡（人間が生活行動をしたあと—生活地点）が存在する場所は、地形的な要因もさることながら、むしろ地理的・自然環境的・人文的な諸要因の側に大きな比重をかけて選地されたということになるのである。

そこで、本稿では、斯様な前提に立って、以下県内における前期後半に位置づけられる遺跡分布を概観していくことにする。なお地勢的に関東地方東部に位置する千葉県は、周知のごとく北を利根川で茨城県と境され、西は東京湾に臨み、東は太平洋に接した南伸する半島地形を呈している地域である。しかも、内陸南半には房総丘陵と呼ばれる標高300m以上の丘陵地帯を擁し、利根川側に北向するにしたがって高度を低め、台地地形を形づくっている地域もある。

このような地形特徴をもつ千葉県における遺跡分布を扱った研究は、現在知られるところでは少なく、わずか2・3例が知られるのみである。本稿では、その中でも、特に伊藤和夫氏が「千葉県石器時代遺跡地名表」（千葉県教育委員会）の中で扱った地域区分法を参考にして、該時期の遺跡分布をみていこうと考えている。蛇足ながら付記すると、伊藤和夫氏の地域区分は石器時代漁撈活動——なかでも貝塚の分布を知るための手段としているのであるが、筆者は、前述したごとく自然環境的・地理的要因をもつ人間生活の「あと」である以上、水界との密接な関わりにおいてこそ、人間の生活地点は選地されるものであると考えているため、敢てこの区分法を大きな地域をとらえていくにあたって参考としたのである。水系によって地域区分すると次の5つの地域に分けられる。1. 現利根川水系地域 2. 奥東京湾地域 3. 現東京湾地域 4. 南部外洋地域 5. 外太平洋地域 が、これである。

これら、個々の地域別については、伊藤和夫氏の詳細な説明があるので、ここでは省略するが、筆者はこの上に内陸部に位置する遺跡も各地域に流出する河川を通じて加味しようとするものであり、そこにこそ、あらゆる種類の遺跡を包括することができるものと考えているので

表－1 縄文時代前期後半期の地域別・遺跡種別一覧表（各下段は追加分）

	包含地（集落）	貝塚（集落）	地点貝塚（集落）
1.現利根川水系地域	46（3）	5	1
	8	2	1（1）
2.奥東京湾地域	4（1）	1（1）	3（2）
		3	
3.現東京湾地域	32（7）	5（2）	14（10）
	6	3	
4.南部外洋地域	3		
	4	2	
5.外太平洋地域		1	
	1	2	
千葉県全体	104（11）	24（3）	19（13）

ある。さしずめ前者を大地域区分とするならば、後者は小地域区分とも呼称できるのではないだろうか。

現在明らかにされている前期後半期に位置づけられる遺跡は、本稿起草の時点に、115ヶ所を認め、その後の追加で32ヶ所を加え、総数147ヶ所になっている（挿図－1 表－1・2・3）。

今後、さらに遺跡数は追加補充されるものと思われ、ここで概観しようとする分布傾向も、将来には多少変わるかもしれないが、大枠においてはその変化はないものと思われる。表－1を参照してもらいたい。

千葉県内では、現在、明瞭に該時期の集落遺跡とされるものが27遺跡確認されている。それ以外はただ単なる包含地なり、貝塚・地点貝塚とされているもので、住居址・土壙等が未だ検出されていない遺跡である。しかし、今後の調査・研究によっては、さらに増加していくことがはばまちがいなく予想されるのである。もちろん、これら未だ遺構等の発見されていない遺跡をその全てが集落であったなどということではなく、中には、食料獲得の場としての簡単なキャンプ地もあったであろうし、当時の交通路に面した中継地的な機能をもった場所もあったであろう。しかし、当時の人々の生活痕跡としての遺物の集中度の高い遺跡にあっては、筆者が先に触れた自然環境的・地理的・人文的な要因（条件）さえみたとすればその可能性はあるものと考えられるのである。そこで、これらの遺跡を集落という制約のある枠ではなく、集落を包括した立場に立って観察していくことにしよう。

まず、遺跡を種別の上からみていくと、各地域とも包含地としたものがその主体を占めていることがわかる。たとえば、遺跡（生活地点）の最も集中している現利根川水系地域を参考にしてみると、総数63遺跡のうち80％強に相当する54遺跡までを包含地が占め、貝塚7遺跡、地点貝塚2遺跡をみるにすぎない。この傾向は現利根川水系地域に限ったことではなく、現東京湾地域においても地点貝塚とした遺跡の割合は増しているものの、やはり包含地が全体の5割強の数値を示しているのである。

図-1 千葉県下における縄文前後半期の遺跡分布(▲貝塚、○集落・包含地)

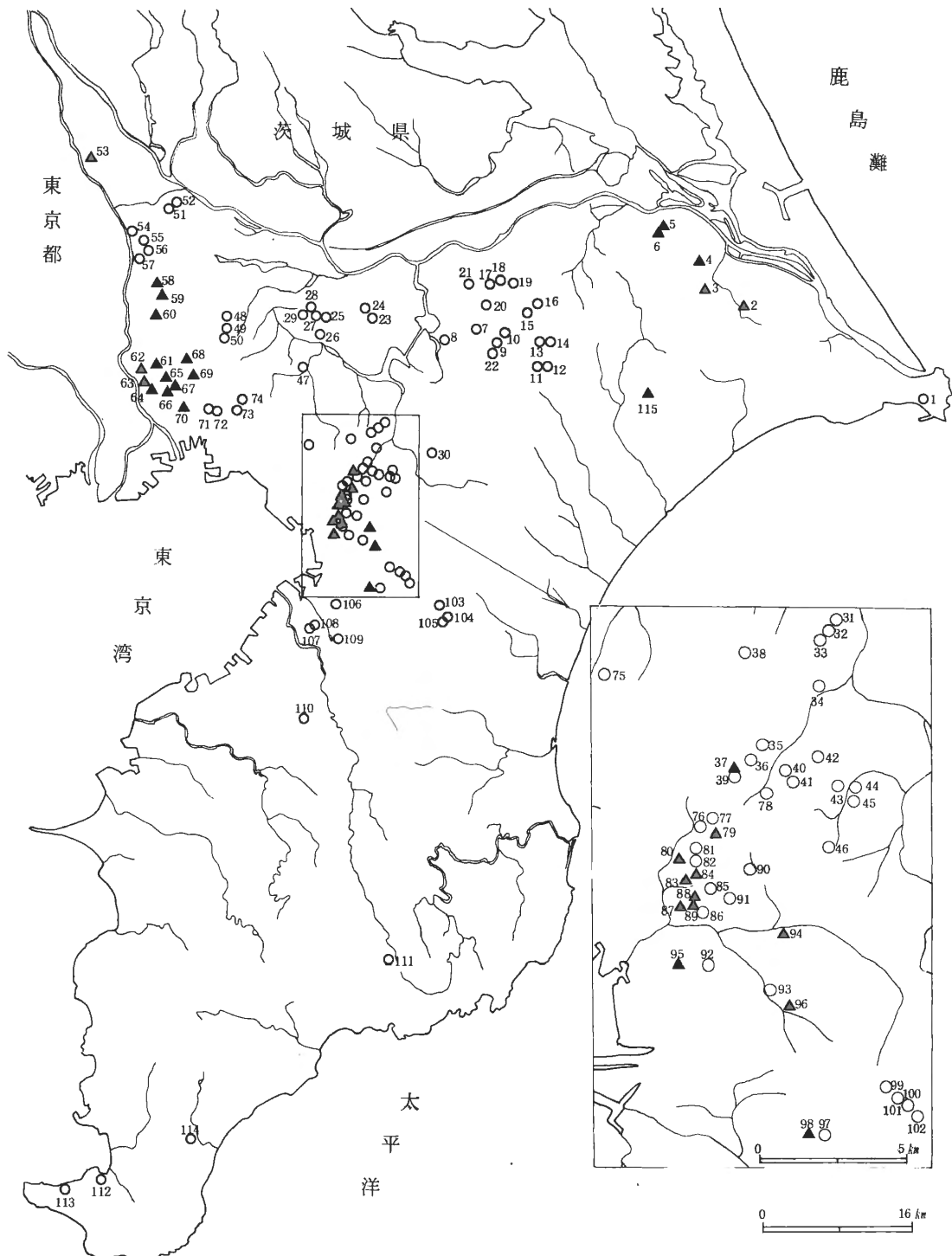


図-1 千葉県下における縄文前期後半期の遺跡分布(▲貝塚、○集落・包含地)

しかも、この包含地とされる遺跡は、地理的にごく内陸の河川流域にあるばかりではなく、旧海岸地域に近い部分にまでその存在は及んでいるのである。すなわち、現利根川水系地域の河口、銚子市にある粟島台遺跡や奥東京湾地域にある中野久木遺跡・桜窪遺跡など現在流山市内に所在する遺跡群、古和田台遺跡・飯山満東遺跡など現在船橋市内に位置する遺跡、さらには辺田遺跡・車坂遺跡など現在千葉市内にある遺跡群などがそれである。いずれも周辺には、同時期の貝塚を伴う遺跡の存在がありながら貝塚及至地点貝塚をも伴わないのである。この原因は何によるものであろうか。少なくとも、当時代人たちの生活行動としての自然環境的な要因（条件）はみたしていると思われるのであるが……。つまり、単一要因（条件）をみただけではなく、他の地理的・人文的な要因（条件）もみかさなくてはならない何かがあるのであろう。今後の課題としていかななくてはならない問題である。

次に、これらの遺跡を小地域区分の中でとらえた集中傾向の上から眺めてみよう。地域的な集中がみられる地域を抽出してみると、ほぼ9ヶ所の地域に比較的まとまりがみられる。

そのⅠは、現在銚子市域であって、4ヶ所の遺跡が認められている。いずれも標高25～30m台の台地上に占地しており、貝塚を伴う遺跡はなく、遺跡範囲も狭いものばかりである。土器は浮島式・諸磯式とも両者がみられるが、荒野台遺跡のごとく十三菩堤式を僅かに出土する遺跡もある。しかし、その詳細については未だ不明の点が多いと思われる。

Ⅱは、現利根川に河口をもつ黒部川及び小野川流域に集中している群である。6遺跡が認められ、いずれも標高20～45m余の洪積台地上の流域に臨んで立地している。尚、これらの遺跡は貝塚を伴っているが、該時期に比定される貝塚はなく、城の台遺跡が早期中葉に位置づけられるほかは、すべて、中期初頭の時期を主体とするもので占められている。ちなみに、前期後半期に位置づけられる遺物はいずれも微量なものであり、その主体をなすものではない。

Ⅲは、根木名川流域に集中して分布する群である。現在18ヶ所の所在が認められており、現利根川水系地域では最も密な集中度を示している。このうち半数余はすでに調査されているが、土壌等の遺構が検出されて集落と考えられているのは、加定地遺跡のみである。これら18遺跡はいずれも洪積台地上に位置しているが、東方遺跡のごとく遺跡前面の低湿地域にも遺物を包含しているものもある。貝塚を伴うものはなく、遺跡個々の規模もさほど大きなものとはいえない。ちなみに加定地遺跡についてみると、標高25～35mの谷頭に臨んだ台地上の狭い範囲に数基からなる土壌群を検出している。これらの土壌中からは、日常什器とは明らかに異ったそれぞれ1～2個のほぼ原型を保ち得る赤色顔料による塗彩をした鉢形土器が出土しており、何か特殊な目的一たとえば祭祀というようなものに関わりをもつ遺構群であったと考えられている。時期的には浮島Ⅲ式から興津式期のものであろう。

Ⅳは、印旛湖沼地帯に含まれる鹿島川流域のものである。遺跡はこの中・下流域に集中しており現利根川水系のものとしては根木名川流域に次いで多い数値を示している。17遺跡の所

在が知られる。これらは標高15～35m余りの洪積台地上にいずれも占地し、2ヶ所の貝塚を伴う遺跡以外は全て包含地遺跡である。なおこの流域は、現在、確かめられている唯一の集落である和良比遺跡に代表されるような浮島系土器文化が比較的濃厚にみられる地域でもあり該土器群の出土比重が諸磯土器群のそれよりも主体となって検出されている。

Vは、同じ印旛湖沼地帯の西面を形づくる神崎川流域である。現在5ヶ所の存在が知られている。いずれも標高20～30mを測る台地上が生活地点として選地され、狭い支谷を挟んで相対峙するような集中傾向がみられる。これらのうち高根北遺跡では浮島Ⅲ式に営まれていたと考えられる住居址が検出されており、他の4遺跡においても浮島式土器の出土量が諸磯式土器のそれに比して主体的な地域である。

Ⅵは、奥東京湾に臨んだその東岸地域で、現江戸川に河口をもつ小河川に沿って11遺跡の分布がみられる。地理的には、いずれも洪積台地上に位置しているものの、他地域に比して遺跡が立地している標高は15～28m台と低位置である。これらのうち貝塚ないし地点貝塚を伴っている遺跡は6遺跡で、現在流山市内に位置する5遺跡には貝塚の存在が知られていない。なおここで見られる貝塚を構成している貝類は、いずれも内湾砂泥性の浅海地帯に棲息する貝種で占められているところから、それらの遺跡からごく近隣の場所で採取されたものと思われる。このことは、これらの遺跡の付近にまで海水が及んでいたことを推察することができ、当時の自然環境を考える上に大きな役割をはたすものと思われる。また野田北前・中野久木・中金杉木戸口、それに北小金の4遺跡は集落とされる遺跡で、野田北前で浮島Ⅰ式期の、中野久木では興津式及至は前期末の、北小金では浮島Ⅲ式期の住居址がそれぞれ発見されている。浮島式、諸磯式の土器群の比率割合からみると、総じて浮島式土器が主体的であるが、中には野田北前遺跡のごとく例外的な出土を示すものもある。

Ⅶは、現市川市から船橋市にかけての現東京湾奥域である。15遺跡の存在が知られる。これらの遺跡のうち久保上・根郷留見・イゴ塚それに貝殻塚の4遺跡以外は標高13～26mを測る洪積台地上に占地する遺跡であり、前4者は5～10m余りの低地に存在している遺跡である。貝塚ないし地点貝塚を伴うものは、内9ヶ所が認められる。また住居址・土壙等の発見によって集落と考えられるものは15遺跡中約半数に相当する8遺跡がみられる。秋山牧之内・北台・久保上・殿台・株木・美濃輪台・飯山満東、それに古和田台遺跡などがそれである。ちなみに飯山満東遺跡と古和田台遺跡との検出した遺構を観察してみるとしよう。飯山満東遺跡では、住居址4基のうち2基が諸磯a式期、のこる2基が浮島式期のものであり、また200ヶ所余り検出された小型ピットも、報文では諸磯a・b式及び浮島式のものであるとしながらも、そのピット中に埋納されていた多くの鉢形土器をみるに、その多くは諸磯a・b式の濃い傾向がみられるようであり、総じて本遺跡は土器の出土量比的には浮島式土器が多いものの、集落の構成自体からは諸磯系文化の影響を濃厚にもつ遺跡として理解することができ

るようである。次に古和田台遺跡の場合は、9基検出された住居址のうち、諸磯系のものはわずかに1基のみで、のこる8基の住居址は、いずれも浮島Ⅲ式・興津式をもつ住居址によって占められており、土壌2基も浮島Ⅲ式期に位置づけられるものである。出土土器の傾向をみてもこの傾向はうなずけるものである。斯様な事柄から、ここに古和田台遺跡を浮島式系、特に浮島Ⅲ式・興津式期に営まれた集落と考えることができるであろう。

ただ、ここで留意しておかなくてはならないことは、この2遺跡はその両者の位置的關係において、僅か1.5kmというほんの指呼間の距離に所在しているにもかかわらず、なぜその文化様相の上にこのように大きな相違を生じているのであろうか。単に個々の遺跡の造営時間の差異だけでは、片付けられない何かがあるようである。稿を改めてこの疑問には触れてみたいと考えている。土器文化の上から総じてみると、本地域は先の飯山満東遺跡と市川市所在の北台遺跡とが諸磯系的色彩が濃いのに対し、古和田台遺跡をはじめとする13遺跡においては、浮島式土器群が主体を占めているのである。

Ⅳは、千葉市域を流れ、現東京湾に流出する都川流域である。24遺跡が知られ、特にその大半は下流地域に集中する傾向がある。しかも下流地域に集中分布している遺跡は、貝塚（その多くは地点貝塚）を伴っているものと伴わないものとが共存し、遺跡間の様相に複雑さをみせている。遺跡立地の上から本地域の遺跡を類別すると大きく三つに分けて考えることができる。すなわち、宝導寺台遺跡のように沖積低地に占地し、極めて特殊な在り方（台地直下の沖積地に存在し、調査によって堆積している貝層と包含されている土器・石器等の遺物が、後世、海面下に没していた時期のあったことが明らかになっている）をしているものや、河成段丘に位置するビツ首台遺跡、それに標高20～60m台の洪積台地上に立地するその他の遺跡群をみるのできるのである。そして、これらの遺跡群の中で集落とされているものは、4割弱の9遺跡を数えているが、実際遺構が検出されているものは少なく、木戸場遺跡における諸磯b式期の住居址、車坂遺跡の小竪穴（諸磯b式期）、それに藤沢遺跡での土壌（前期後半期）の3例がみられるにすぎない。また浮島式・諸磯式土器の拡がりからみると諸磯系の土器もあるにはあるが、その主体は浮島式土器群によって多くの遺跡は占められている。しかもその浮島式土器は、所謂利根川以北でいっているそれとは、器形・文樣的に多少の違いをみせるものである。この事柄に関しては項を改めて論じようと考えている。

Ⅴは、房総半島の中程、現東京湾に流出する小櫃川下流域に集中的に分布している群である。これらの遺跡については、挿図への提出が遅れたためにドットが落せなかったのであるが、6遺跡の存在が知られる。いずれも標高40～88m余りの地形的には丘陵に近い台地上に占地しており、個々遺跡での規模は比較的小さいものばかりである。その内容は、調査も行われていない遺跡が多いことから不明な部分が多いが、土器分布の上からは、やはり浮島式土器と諸磯系のそれとが共存しているようである。今後の精査が待たれる地域でもある。

以上、県内における前期後半期に位置づけられる遺跡を（一）遺跡の種別、（二）遺跡の集中傾向を通じてその分布・立地傾向を概観してみた。

そこでは、これらの遺跡は未だ性格的に不明な遺跡も多く、明らかに集落としてとらえられるものは27遺跡にすぎなかった。しかもその中でも全体を把握し得るものが少なく、集落構造などを解明できるのは2・3を数えたにすぎない。今後、この面における調査・研究の進捗が望まれるところであろう。

遺跡の種別からみた分布傾向については、各地域とも包含地とされる遺跡が量的に高い数値を示しており、貝塚や地点貝塚の比率は少ないものであった。また地理的にこれらの遺跡の分布をみる時、貝塚ないし地点貝塚が旧海岸地帯に展開するのはうなずけるものの、なかには河川中流域よりさらに奥域にあたる内陸地域にまで貝塚の分布が地域によっては及んでいるものもみられ、そのような内陸部での他の包含地との関わりあいのなかでどのように理解していくのか、興味深く思われた。また逆に旧海岸地帯における包含地遺跡についても同じ視点で同様の疑問が提出できる。

遺跡の集中傾向に関しての問題は、既述したように今後遺跡の数量的増加が予想できるので何ともいえないが、本稿では現時点までに確かめえた遺跡を対象にして、その集中傾向を小地域区分（大きい地域区分に対して、それに関わりをもつ小河川流域など）によって通観した。その結果、遺跡集中がみられたのは9ヶ所の地域であり、その個々の地域における構成遺跡の在り方をみるとともに、前期後半を特徴づける両地域（関東東北部地域、関東西南地域）の土器文化の比重を集落構造・遺物傾向などから少し触れてきた。そこでは、小地域区分によって得た9ヶ所の地域が、その内実とする個々の遺跡の性格づけが明白にされていないことなどから、確実な地域観とするものが生ぜず、莫とした傾向が認められたにすぎなかった。また、地域によってはその内部で、Ⅶとした現東京湾奥域の飯山満東遺跡と古和田台遺跡とのように互いに近隣にあり、時間的同時性も部分的にとらえられるのにもかかわらず、集落構造・遺物傾向（土器様相）などが隔離するような関係も認められ、もし、これを一つの集中地域の枠内に包括するのならば、どのように解釈すればよいのか、今後課題がのこされた。

総じて、このようにみてきた縄文前期後半期の遺跡の分布は、資料の益々の蓄積とともに、「人間の生活行動のあと」であるという基本的な観点に立って、より緻密に、より正確に整理検討を加えて行かなければならない事柄といえるであろう。

表-2 千葉県下における縄文前期後半期遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	所在地	立地	標高(m)	前期後半における所属時期	備考	水系
1	栗島台	包含地	銚子市小川町栗島台	台地上	27~30	諸磯		利根川
2	阿玉台	貝塚	香取郡小見川町阿玉台	谷頭台地上	30~40	浮島Ⅰ		利根川
3	雷	貝塚	香取郡小見川町白井大宮台雷	舌状台地縁辺	40	浮島		利根川
4	木之内明神	貝塚	香取郡小見川町木之内	谷頭台地上	35~40	諸磯、浮島		利根川
5	三郎作	貝塚	佐原市新市場三郎作	谷頭台地上	20~45	浮島Ⅰ~Ⅲ		利根川
6	下小野	貝塚	香取郡小見川町下小野	舌状台地縁辺	30~35			利根川
7	加定地	集落 包含地	成田市郷部加定地	谷頭台地上	25~35	浮島Ⅰ~Ⅲ(●)、諸磯a・b(●)、興津	赤彩土器埋納土壇数基	利根川
8	橋賀台Ⅱ	集落	成田市橋賀台2丁目	台地上	35	浮島Ⅰ~Ⅲ(●)、諸磯a(●)・b、十三菩堤	住居址2(浮島Ⅲ・諸磯a)	利根川
9	鳥居下	包含地	成田市東和田字鳥居下	台地上	30~35	諸磯b		利根川
10	大山	包含地	成田市小菅字矢ノ尾	谷頭台地上	25~35	浮島Ⅲ		利根川
11	神台	包含地	成田市木ノ根字神台	舌状台地上	30~37	浮島Ⅱ・Ⅲ		利根川
12	三里塚14	包含地	成田市古込	舌状台地基部	37~40	浮島Ⅱ・Ⅲ		利根川
13	駒の頭	包含地	成田市取香字駒の頭	台地上	35~40	興津		利根川
14	松翁南	包含地	成田市東峰字松翁	台地上	30~35	浮島Ⅱ・Ⅲ		利根川
15	稻荷峰	包含地	成田市稻荷峰	谷頭台地上	27~30	諸磯b		利根川
16	堀起	包含地	成田市小泉字堀起	舌状台地縁辺	30~35	諸磯		利根川
17	飯岡	包含地	成田市飯岡字宮ノ後	台地上	30~35	浮島Ⅱ・Ⅲ		利根川
18	旧久住中南	包含地	成田市幡谷字桜谷津	台地上	30~35	浮島Ⅱ・Ⅲ、興津		利根川
19	土室	包含地	成田市久住字土室	谷頭台地上	35~40	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯b、興津		利根川
20	東方(含低地)	包含地	成田市東金山字東方	台地縁辺及び低湿地	台地30~35 低地1~2	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯b		利根川
21	石橋	包含地	成田市南羽鳥字石橋	谷頭台地上	25~35	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯b		利根川
22	松の木台	包含地	印旛郡富里村日吉倉松の木台	台地上	30	浮島Ⅰ~Ⅲ(●)、諸磯a・b・c 興津、十三菩堤		利根川
23	五斗蒔	包含地	印旛郡本埜村字龍腹寺五斗蒔	台地縁辺	25~30	浮島Ⅱ・Ⅲ、諸磯a・b		利根川
24	石道谷津	包含地	印旛郡印西町小林字石道谷津	台地縁辺	25	浮島Ⅱ・Ⅲ、諸磯a~c、興津		利根川
25	南西ケ作	包含地	印旛郡印西町南西ケ作	舌状台地先端	25~30	浮島Ⅱ・Ⅲ、諸磯b		利根川
26	船尾白幡	包含地	印旛郡印西町船尾白幡	舌状台地先端	25	浮島Ⅲ、興津		利根川
27	高根北	集落	印旛郡印西町小倉字大塚前	舌状台地縁辺	20~23	浮島Ⅰ~Ⅲ(●)、諸磯a~c、興津、十三菩堤	住居址1(浮島Ⅲ)	利根川
28	木刈峠	包含地	印旛郡印西町浦幡新田木刈峠	谷頭台地上	23~25	興津		利根川
29	一本桜	包含地	印旛郡白井町十余一字一本桜	舌状台地上	19~21	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯a~c、興津(●)		利根川

30	星谷津	包含地	佐倉市岩富星谷津	台地上	37	浮島Ⅰ～Ⅲ、諸磯a		利根川
31	池下	包含地	四街道市亀崎字池下	舌状台地縁辺	15～25	興津		利根川
32	鶴口	包含地	四街道市亀崎字鶴口	複合谷津台地上	25～29	浮島		利根川
33	千代田	包含地	四街道市千代田5丁目	台地上	28	浮島		利根川
34	後山	包含地	四街道市長岡字後山	舌状台地上	20	浮島Ⅱ・Ⅲ		利根川
35	内ノミ台	包含地	四街道市鹿渡字内ノミ台	台地上	20～22	浮島、興津		利根川
36	木戸場	包含地	四街道市鹿渡字木戸場	舌状台地縁辺	25～28	浮島		利根川
37	中三角	地点貝塚	四街道市四街道中三角	台地上	30	浮島		利根川
38	畔田台No.2	包含地	四街道市大日字畔田台	舌状台地上	20～30	浮島Ⅲ		利根川
39	本山	包含地	四街道市和良比字本山	台地縁辺	20～25	浮島、興津		利根川
40	椎ノ木	包含地	四街道市小名木字椎ノ木	台地縁辺・斜面	20～25	浮島		利根川
41	東谷津	包含地	四街道市小名木字東谷津	台地縁辺	20～25	浮島、諸磯b		利根川
42	前山	包含地	四街道市上野字前山	舌状台地基部	31	浮島、興津		利根川
43	八石	包含地	四街道市吉岡字八石	舌状台地上	20～30	興津		利根川
44	根田	包含地	四街道市吉岡字根田	舌状台地上	15～30	諸磯b		利根川
45	向原	包含地	四街道市吉岡字向原	谷頭台地上	25～30	浮島		利根川
46	瓜ノ作	包含地	四街道市吉岡字瓜ノ作	台地縁辺	35	浮島		利根川
47	睦小学校	包含地	八千代市桑納	舌状台地上	20～24	浮島Ⅲ		利根川
48	山王台	包含地	鎌ヶ谷市佐津間字山王台	舌状台地上	22	浮島		利根川
49	橋本	包含地	鎌ヶ谷市粟野	舌状台地上	26～28	浮島Ⅱ(●)・Ⅲ、諸磯a		利根川
50	五本松	包含地	鎌ヶ谷市粟野	台地縁辺	20～25	浮島		利根川
51	水砂	包含地	柏市大青田字水砂	低台地縁辺	12～16	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯a～c、興津(●)、十三菩堤		利根川
52	館林	包含地	柏市船戸字館林	低台地縁辺	14～17	浮島Ⅰ～Ⅲ(●)、諸磯b・c、興津、十三菩堤		利根川
53	北前	集落・貝塚	野田市堤台	谷頭低台地上	15～16	浮島Ⅰ・Ⅱ、諸磯a・b(●)	住居址2(浮島Ⅰ)	奥東京湾
54	中野久木	集落	流山市中野久木	台地縁辺	15～20	浮島Ⅰ・Ⅱ(●)・Ⅲ(●)、諸磯a～c、興津(●)、十三菩堤	住居址3(興津(2前期末))	奥東京湾
55	桐ヶ谷新田	包含地	流山市西初石	舌状台地先端	20	浮島Ⅰ～Ⅲ、諸磯a		奥東京湾
56	桜窪	包含地	流山市西初石	台地縁辺	20～21	浮島Ⅱ・Ⅲ、諸磯b		奥東京湾
57	茂呂神社脇	包含地	流山市三輪野山	台地縁辺	20	浮島Ⅰ～Ⅲ、興津		奥東京湾
58	中金杉木戸口	集落 地点貝塚	松戸市中金杉木戸口	谷頭台地上	19～20	諸磯a・b		奥東京湾
59	北小金	集落 地点貝塚	松戸市小金	舌状台地縁辺	20	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯a・b、興津	住居址(浮島Ⅳ)	奥東京湾
60	八ヶ崎南道合	小貝塚	松戸市八ヶ崎南道合	台地上	26	諸磯b		奥東京湾
61	秋山牧之内	集落 地点貝塚	松戸市秋山牧之内	谷頭台地上	20～25	浮島Ⅰ(●)・Ⅱ(●)・Ⅲ(●)、諸磯b		現東京湾

番号	所在地	種別	所在地	立地	標高(m)	前期後半における所属時期	備考	水系
62	北台	集落・地点貝塚	市川市中国分町旧東練兵場	台地縁辺	24	浮島Ⅰ～Ⅲ、諸磯a・b(●)	住居址1(諸磯b)	現東京湾
63	久保上	集落・貝塚	市川市真間5丁目	低地	5～7	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯a、興津		現東京湾
64	根郷留見	小貝塚	市川市須和田2丁目根郷留見	低地	10	浮島Ⅱ・Ⅲ、諸磯a		現東京湾
65	イゴ塚	小貝塚	市川市曾谷4丁目	低地	8	前期末		現東京湾
66	三中校庭	貝塚	市川市曾谷3丁目	谷頭台地上	17～20	浮島		現東京湾
67	下貝塚	貝塚	市川市下貝塚町木戸口	谷頭台地上	20	浮島Ⅰ		現東京湾
68	殿台	集落	市川市大野町4丁目	台地縁辺	22	浮島Ⅲ(●)・Ⅳ(●)、諸磯a・b	住居址1(諸磯b) 小竪穴3(諸磯a・b)	現東京湾
69	株木	集落・地点貝塚	市川市柏井町4丁目	低台地縁辺	13～15	浮島、諸磯		現東京湾
70	美濃輪台	集落	市川市本北方3丁目	舌状台地縁辺	19	浮島Ⅰ・Ⅱ		現東京湾
71	夏見台西	包含地	船橋市夏見町	台地縁辺	20～21	浮島、諸磯		現東京湾
72	八栄北	包含地	船橋市夏見町2丁目	台地縁辺	20～22	浮島Ⅱ・Ⅲ、諸磯a		現東京湾
73	飯山満東	集落	船橋市飯山満1丁目	舌状台地上	24	浮島Ⅰ(●)～Ⅲ(●)、諸磯a(●)・b(●)・c、興津、十三菩提	住居址4(浮島Ⅰ・浮島Ⅲ、諸磯a(2)) ピット(含土器埋納)207(諸磯a・b、浮島)	現東京湾
74	古和田台	集落	船橋市高根町字古和田台	舌状台地上	24～26	浮島Ⅰ～Ⅲ(●)、諸磯b・c、興津(●)	住居址9(諸磯b・1、浮島Ⅲ・3、興津・4、不明・1)、土壇2(浮島Ⅲ)	現東京湾
75	大山	包含地	千葉市柏井町字大山	台地上	26～28	興津		現東京湾
76	渡戸台	包含地	千葉市原町字渡戸台	谷頭台地斜面	26～30	浮島、諸磯		現東京湾
77	渡戸	包含地	千葉市原町字渡戸	台地上	30	諸磯		現東京湾
78	東台	包含地	千葉市若松町字東台	舌状台地上	28～30	興津		現東京湾
79	北原	包含他点 点在貝塚	千葉市高品町字北原	台地上	30	浮島		現東京湾
80	宮腰	包含他点 点在貝塚	千葉市高品町字宮腰	舌状台地縁辺	28～30	浮島		現東京湾
81	駒形	包含地	千葉市高品町駒形	台地縁辺	26	浮島・諸磯b		現東京湾
82	キツ長	包含地	千葉市高品町字キツ長	舌状台地縁辺	26～29	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯b		現東京湾
83	東田	集落・点在貝塚	千葉市高品町字東田・貝塚	舌状台地先端斜面	26～29	興津、諸磯c		現東京湾
84	荒屋敷西	集落・点在貝塚	千葉市貝塚町荒屋敷	台地縁辺	26～30	諸磯		現東京湾
85	車坂	集落	千葉市貝塚町字車坂	舌状台地上	26～28	浮島、諸磯b	小竪穴1(諸磯b)	現東京湾
86	辺田	包含地	千葉市都町字向台小字辺田	台地縁辺	24	諸磯		現東京湾
87	宝導寺台	貝塚	千葉市都町字宝導寺台	舌状台地先端 斜面 低地	8～9	浮島Ⅰ～Ⅳ(●)、諸磯b・c	焚火址、被海水貝層	現東京湾
88	木戸場	集落・点在貝塚	千葉市都町字木戸場	台地縁辺	14～18	諸磯b	住居址1(諸磯b)	現東京湾
89	向の台	集落・点在貝塚	千葉市都町字向の台	舌状台地先端	18	諸磯		現東京湾
90	加曽利	包含地	千葉市桜木町字京願台	台地縁辺斜面	16～30	浮島Ⅰ～Ⅳ(●)、諸磯a～c、興津(●)		現東京湾

91	立 木	包 含 地	千葉市加曾利町字立木	舌状台地上	28～30	浮島		現東京湾
92	ビツ首台	包 含 地	千葉市星久喜町 271 字枇杷首台	河成段丘斜面	10～16	浮島Ⅰ～Ⅲ(●)、諸磯b・c、興津(●)		現東京湾
93	大和田	包 含 地	千葉市大宮町字大和田	台 地 上	34～35	諸磯b・c、興津		現東京湾
94	滝ノ谷	集在貝塚	千葉市大宮町滝ノ谷・大久保	舌状台地先端	20～32	諸磯		現東京湾
95	稻荷山	集在貝塚	千葉市千葉寺町字稻荷山	舌状台地先端	18～20	諸磯		現東京湾
96	吾 妻	集在貝塚	千葉市平山町字吾妻	舌状台地先端	36～39	諸磯		現東京湾
97	居原ノ山	包 含 地	千葉市大膳野町字居原ノ山大膳野	台 地 上	50～51	浮島、諸磯		現東京湾
98	長 堀	集落貝塚	千葉市大金沢町字長堀・フシギ	台 地 上	50～52	諸磯		現東京湾
99	中 芝	包 含 地	千葉市高田町字中芝	舌状台地上	53～55	浮島Ⅰ～Ⅲ、諸磯c、興津		現東京湾
100	奈木台 5	包 含 地	千葉市誉田町字奈木台	舌状台地基部	56	興津		現東京湾
101	奈木台 6	包 含 地	千葉市誉田町字奈木台	台 地 縁 辺	53～59	浮島Ⅰ・Ⅱ、諸磯b、興津		現東京湾
102	藤 沢	包 含 地	千葉市高田町字藤沢	台 地 縁 辺	55～60	浮島Ⅰ・Ⅱ(●)、Ⅲ(●)、諸磯a、b(●)、c、十三菩提	土壌 1 (前期後半)	現東京湾
103	南河原坂第5	包 含 地	千葉市小食土町字南河原坂	台 地 縁 辺	88～90	浮島Ⅰ～Ⅲ(●)、諸磯b・c、興津(●)		現東京湾
104	文六第 1	集 落	千葉市小食土町文六	谷 頭 台 地 上	92～94	浮島Ⅰ(●)・Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯a～c、興津(●)、十三菩提	住居址 5 (浮島Ⅰ・2、Ⅲ・2、諸磯a・1)、土壌(含、土器埋納) 200 以上 (浮島Ⅰ・Ⅲ、諸磯a・b、興津)	現東京湾
105	文六第 2	集 落	千葉市小食土町文六	台 地 縁 辺	87～89	浮島Ⅱ、諸磯a～c、興津、十三菩提	土壌 4 (浮島Ⅱ・1、興津、3)	現東京湾
106	辰己ヶ原	包 含 地	市原市山木辰己ヶ原	台 地 縁 辺	25～30	浮島Ⅰ・Ⅱ、諸磯a・b		現東京湾
107	台	包 含 地	市原市根田字台	舌状台地縁辺	25～30	諸磯a・b(●)、浮島Ⅱ・Ⅲ		現東京湾
108	坊 作	包 含 地	市原市加茂坊作	台 地 縁 辺	23～25	諸磯		現東京湾
109	上 中 貝	包 含 地	市原市能満	舌状台地上	60～62	浮島Ⅰ～Ⅲ、諸磯a～c		現東京湾
110	萩ノ原	包 含 地	市原市上高根字萩ノ原	舌状台地上	85～88	浮島Ⅰ～Ⅲ、興津		現東京湾
111	会 所	包 含 地	夷隅郡大多喜町老川会所	河成段丘上	180～240	諸磯		現東京湾
112	赤 山	包 含 地	館山市沼	台 地 上	40	諸磯a・b、十三菩提		南部外洋
113	鉈 切	海食洞窟	館山市浜田船越	海成段丘上	20	十三菩提		南部外洋
114	加 茂	泥炭層	安房郡丸山町加茂	丘陵裾低湿地	20	浮島Ⅱ・Ⅲ、諸磯a(●)、b(●)、c		南部外洋
115	八 辺	貝 塚	八日市場市八辺字向郷	台 地 縁 辺		諸磯		外太平洋

表-3 千葉県下における縄文前期後半期遺跡地名表（追加分）

番号	遺跡名	種別	所在地	立地	標高(m)	前期後半における所属時期	備考	水系
116	荒野台	包含地	銚子市西小川町荒野台	台地上		十三菩提		利根川
117	富塚	包含地	銚子市高神東町富塚	台地上		諸磯		利根川
118	トウゲ山	包含地	銚子市高神西町トウゲ山	台地上		諸磯		利根川
119	台町	包含地	銚子市西小川町台町	台地上		諸磯		利根川
120	城之台	貝塚	香取郡小見川町城之台	舌状台地鞍部	40	諸磯		利根川
121	植房	貝塚	香取郡神崎町植房		35	諸磯		利根川
122	三里塚Ⅲ13	包含地	成田市古込朝日丘	台地縁辺	41	浮島Ⅱ・Ⅲ、十三菩提		利根川
123	三里塚Ⅲ51	包含地	成田市東三里塚	舌状台地上	40～42	浮島Ⅱ・Ⅲ		利根川
124	橋賀台Ⅰ	集落	成田市橋賀台2丁目	舌状台地基部	30	浮島Ⅱ・Ⅲ	住居址1（浮島）	利根川
125	伊篠新田	包含地	印旛郡富里村伊篠新田	舌状台地上	35～40	浮島、諸磯		利根川
126	和良比	集落 地点貝塚	四街道市和良比	台地上		浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯b、興津十三菩提	住居址7（浮島Ⅲ） 土壇（諸磯b、浮島Ⅲ）	利根川
127	鷹の見	包含地	流山市恩井赤松	低台地上	10～18	浮島Ⅰ～Ⅲ(●)、諸磯b、興津		奥東京湾
128	中金杉道六神	貝塚	松戸市中金杉道六神	台地上	20	諸磯b、興津		奥東京湾
129	上本郷	地点貝塚	松戸市上本郷戸張	台地上	27～28	諸磯b		奥東京湾
130	貝殻塚	小貝塚	市川市曾谷4丁目	低台地上	7～10	諸磯		現東京湾
131	矢作	包含地	千葉市矢作町字貝殻	舌状台地上	24～28	諸磯b		現東京湾
132	山倉	貝塚	市原市山和町山倉	台地上		諸磯		現東京湾
133	土宇	包含地	市原市土宇	台地上	48	浮島Ⅱ・Ⅲ(●)、諸磯a～c、興津(●)		現東京湾
134	八重門田B	包含地	君津郡袖ヶ浦町久保田字八重門田	台地上	50～60	諸磯		現東京湾
135	堂庭山B	包含地	君津郡袖ヶ浦町久保田字道庭山	台地上	45	諸磯		現東京湾
136	鎌倉街道C	包含地	君津郡袖ヶ浦町久保田字鎌倉街道	谷頭台地上	60	諸磯		現東京湾
137	三ツ塚	貝塚	君津郡袖ヶ浦町三ツ塚字東	台地縁辺	40～45	諸磯		現東京湾
138	向神納里	包含地	君津郡袖ヶ浦町大竹字向神納里	台地縁辺	60～65	諸磯		現東京湾
139	滝口	小貝塚	安房郡白浜町本郷	台地上	30	諸磯、十三菩提		南部外洋
140	長林寺台	包含地	安房郡鋸南町加知山田子台	台地上	75	諸磯		南部外洋
141	長林寺台B	包含地	安房郡鋸南町加知山田子台	山腹平坦面	80	諸磯		南部外洋
142	寿葉寺台	包含地	安房郡富山町高崎大峰	山嘴平坦面	30～40	諸磯		南部外洋
143	出野尾	洞窟内貝塚	館山市出野尾	丘陵端・谷壁	30	諸磯		南部外洋
144	駒寄	包含地	安房郡千倉町駒寄		80	諸磯		南部外洋
145	女ヶ堰	湿地	長生郡睦沢村女ヶ堰	河堰底	10～12	諸磯b		外太平洋
146	下大蔵	包含地	山武郡松尾町下大蔵	台地上		諸磯		外太平洋
147	木戸台	貝塚	山武郡横芝町木戸台	台地上		諸磯		外太平洋